

アマダイ通信NO.57

(Tile fish network letter)

06年 山茶花咲く

知人・友人各位

国民に塗炭の苦しみを強いながらの、北朝鮮の核実験に国際的な非難が集中している。国民に貧困の苦しみを強いながらの実験では、パキスタンや中国、インドも負けてはいない。他国の脅しに使う点では米・英・仏・露も同罪だ。人類を滅亡の淵におく罪でも。北朝鮮の非難は当然として、他の核保有国も、一緒に核廃絶とは行かないのだろうか？

◎若い時楽しかったから？死ぬまで働け！？

団塊世代大量定年退職の07年もまじかに迫る。お前も顔出せ！と一足先に定年年齢を迎えた寮の先輩の飲み会に誘われ顔を出すと、自営の弁護士、医師は勿論、勤務医や高級官僚は一線を引いても、第二、第三の職場で力を発揮している。サラリーマンも会社のトップまで登りつめた人は相談役や顧問で会社に残り、関連会社で第二のサラリーマン生活をする先輩も多い。子会社のトップを任せられ、業績好調で辞められないよとニコニコしている人も、中にはもういいよ、のんびりしたいよと、完全リタイア、悠々自適の人も。

我々団塊の世代は、年金支給開始年齢の繰り下げと、社会と関わりを持ち続けたいという傾向から、60歳定年を迎えても働き続けるのを希望する仲間が多い。ただ、年金支給年齢の繰り下げに合わせて定年を引き下げたり、再雇用制度を作る会社はまだ少ない。一線を引いて会社に残っても、責任のないポジションで、給料も大幅にダウンするケースが多く、働き甲斐は少なくなる。又、定年までサラリーマンを勤めた会社人間が、急に起業しても成功するのは難しく、自力で他所に働き甲斐のある職場を見つけるのもなかなかだ。簡単に適職がみつけれられる社会システムの創出が待たれる。働く意欲と知恵、ネットワークを持つ高齢者を労働力として有効活用することは少子高齢化社会活性化の鍵である。

30歳まで学生、40まで元祖フリーター？の学習塾や予備校講師、50までサラリーマン、50歳からは営業コンサルタントと、安定とはほど遠い、10年毎のジグザグ人生を歩んだ。結果的に定年のない自営業となり、最近も東証1部上場の鉄鋼商社阪和興業社長の北先輩（S37年三鷹寮入寮）から、同社顧問にさせていただき、建築現場に鉄骨や基礎杭を売る手伝いをするようになった。又、故郷能代に、おが屑利用の新素材の工場を作ろうと、友人と奔走している。色々声がかかり、人様の役に立てるのは嬉しいことだが、若い時楽しかったから、死ぬまで働けということか？

◎湊君、癌で逝く・・・彼岸と此岸を分けるは何？

そろそろ夏服も今日までかという秋の日の夜、三鷹寮同期、一ツ橋大保健センターの湊教授の奥方から電話がある。9月初め脳出血で国分寺の駅で倒れ、危篤だという。急に驚かせるよりはとのことで取り合えず電話したという。酒もたいして飲まないのにと、割り切れない思いがする。聞けば40歳前から肝炎が発症、それが肝癌に転化、更に脳に転移して、その腫瘍から出血して倒れたとのこと。余命幾許もないことを知りながら、最後まで淡々と仕事をしていたという。

同世代には肝炎で苦しむ者も多い。日本がまだ貧しく、衛生状態が悪かった時の感染症の予防注射で、先をアルコール消毒しただけの、同じ注射針での回し打ちや、胎内感染もある。働き盛りになって発症、最近はインターフェロンなどいい薬もあるが、全ての患者に効く訳でもない。湊君の場合は医者立場での感染も考えられる。たまに宴席を同じくしても、肝炎でと、杯を手にしない湊君だったが、ここまで悪くなっているとは知らなかった。●も家族や友人が具合悪い時など、色々アドバイスしてもらい、随分助かったが、彼のために何もしてやれなかったのには忸怩たる思いだ。

この1年、三鷹寮の仲間でも1年下の自治省OBで筑波大の古川俊一君、41年入寮同期の市民活動家の豊島直人君、湊君と癌で亡くなった。三人ともアマダイ通信を送っていたので、彼らの苦闘を尻目に、●は暢気な「闘病記」を送り続けていたことになる。手にした彼らの気持ちは如何許りだったか？顔面から火の吹く思いがしないではない。同じ癌患者、何が彼岸と此岸を分けるのだろうか？

◎タンの切れ悪く、声かすれ！咽喉癌？

大腸がん手術から3年経過、取り合えず一息つくと、血圧の高さが気になるが、上が160くらいで、降圧剤を飲む気になれない。それでも何もしない訳にはいかず、OMRONの血圧計を買う。朝測ると上が150前後から下が100前後で、病院で計るより上も下も10くらい低い。そして夜は朝より10前後低い。病院で測る方が高いから、白衣高血圧症だろうか？暫く測って様子を見ることにする。

先日、大江戸線で政治学のO先生の隣に座ると、声がかすれている。初期癌で喉を手術とのこと。●もこの春からタンが切れず、花粉症のせいと思っていたが、花粉症が治まっても直らない。声もかすれるので大腸癌検診の時に、主治医の阿川先生に相談。何ともありませんよ、気になるなら喉飴なめ、よくうがいしなさいと言われたんですがというと、早く診てもらった方がいいですよ！とのこと。「癌も直る病気になったんですね！早期発見が肝心！」と二人で確認。

さっそく三楽病院の耳鼻咽喉科に行く。鼻腔から内視鏡を入れて喉を診てくれる。大丈夫ですよ！何ともありませんよ！声がかすれるのは声帯がやせたからです、とのこと。病気でないのは一安心だが、何のことはない、老化現象だ。声帯ではなく、お腹が痩せればいいのに！本人がまだ若い、元気だ！と思っても、確実に老いているのだ。

◎「国境なき楽団」に紛れ込んだ音痴一匹！

かつて「翔んでイスタンブール」をヒットさせ、早大大学院で環境学を専攻する、歌手の庄野真代さん主催のNPO法人「国境なき楽団」に同行、10月半ばの金曜から月曜にかけてマニラに行く。国境なき楽団は、日本の家庭で子供が大きくなり使わなくなった楽器を集め、アジア・アフリカの途上国の恵まれない子供達の施設に寄付、音楽を通じて、子供達がすくすく育ち、社会に羽ばたく手助けをしている。

一行24名はマニラで、ストリートチルドレンを保護し、規則正しい集団生活に適応させ、学校に通わせる施設三箇所ですべて楽器を寄付、在留邦人ボランティアも交え一緒に演奏し、歌い、踊りなどして交流、楽しく過ごす。宿泊先のマンダリンホテルでは日本フィリピン親善協会主催の庄野真代チャリティコンサートも昼夜二回開かれ、在留邦人中心に大盛況。

国境なき楽団の趣旨に賛同、一行24名の一員として参加したのだが、気が付けば音痴だ。学校の音楽の時間はいつも死ぬ思いをした。大学では中国語の四声の発音が全く区別できず、単位が取れなくて留年を繰り返して、何故か東大に入ってから、劣等生の悲哀をしみじみと味わった。今回、音痴が一人だけ紛れ込み、音楽とは縁がないのに、施設で子供達と一緒に歌う破目になってロパクしたり、コンサートの手拍子も外れたりして、昔の音楽の授業を思い出して、苦笑い。

◎食は東京にあり！

この8月で定年まで2年残り、家内が学校給食の小母さん（栄養士）を退職。その直前に顔を出した寮同期の、高橋首都高常務の「よく外国に行くけど、奥さんと行った方がいいよ」というアドバイスもあり、一緒に久しぶりに韓国へ行く。奥さんの退職記念ならホテルはいいところにしなくちゃとの、アシスタントの声に乗せられ、奮発？いつもは阪急交通のトラピクスや、HISのチャオ、JTB旅物語などの割安ツアーで回数をこなすのだが、ワンランク上のルックJTBの高級？ツアーにする。

9月半ばの金曜昼成田発、三泊四日で一人13万円の釜山、慶州、ソウルを巡る旅。高橋カーテンウォールの社員旅行以来だから、10年振りくらいの韓国。ウェスティン、ヒルトン、インターコンチとホテルは良かったが、韓国料理は他のツアーと一緒に？美味しくくない。叙々苑は勿論、安くて評判の牛角に比べても美味しくないと、偶々席を同じくした日本人客と愚痴る。前回ソウルを旅した時と印象が変わらない。酒も高く、リノリュームの床に座布団を置き、日本では学校給食でも使わないポリプロピレンの食器で食べさせる、余り綺麗じゃない店でビールが中瓶五千ウォン（660円）ほどだ。居酒屋じゃないの？と聞くと、現地ガイドはレストランですよと言い張る。

この数年、年4、5回は海外ツアーに参加したので、随分色々な国の料理を食べているが、本当に美味しいと思ったことは少ない。「食は広州にあり」と言われる広州でさえ、日本の中華料理、広東料理の方が美味しいと思う。安いツアーが多いから美味しいレストランに案内して貰えないのか？日本人好みにアレンジされた外国料理と較べるからか？味も又、その国、都市の豊かさに比例するのか？「食は東京にあり」は確かだが、世界に食を求め、又、旅を続けよう。

◎マジックトイレとシャワービデ

アマダイ通信読みなるほどと思い、この間の海外ツアーで携帯ウォシュレットを持参してよかったよ、という友人の言に、明日から韓国旅行という時に、立ち寄った有楽町のビックカメラで探すのが、売り切れ。柔な尻の出血を気にして釜山に飛ぶが、マジックトイレと称し、ホテルの部屋には皆ウォシュレットがついている。マニラのマンダリンホテルはシャワー式ビデが付いている。底の穴開き水洗から、シャワーが吹き出し、二つの水栓で水温も調節できる。便器で用を足した後、ビデに移動しなければならないが、快適だ。長くスペインの植民地だったフィリピンは、ラテン文化の国なのだと感心する。

釜山のガイドの朴さんは、経済危機後、格差社会の韓国は競争が激しい、特に子供の教育が大変だと嘆く。放課後や休日に、休む間もなく塾や習い事を幾つも掛け持ちさせる。学校の先生への付け届けもすごい。自分は働いていて、学校にお金を持って行けないので、

ヤクルトのような乳酸菌飲料を毎日先生に届けて貰っている。月割で払い易いし、飲む度に先生に自分の子供を意識してもらえると。子供もだが、費用を捻出する親も大変だ。大企業の課長や部長でも、旦那の給料だけでは足りなくて、奥さんが飲食店で皿洗いのアルバイトをしたりする家庭も多いという。ソウルのガイドの李さんは、名門女子大医学部に入れた娘と、アメリカ留学の息子の学費が大変と、ライトバンの後部座席で、仕事そっちのけで居眠りしている。何のために生きるの？子と親の幸せは？と身につまされた久しぶりの韓国だった。

マニラでは逆に、生活の苦しい親が子供を虐待したり、遺棄したりして路上生活する子供が増えているという。数年前に国際協力銀行のセミナーでマニラ空港に降り立った時、空港の駐車場には日本の温泉旅館や会社の名前を書いたままの中古のバンやバスが、ずらり並んでいたが、今回は見掛けない。路上で伊豆箱根鉄道のライオンマークを見たくらいだ。経済全体は良くなっているのだろう。その一方でストリートチルドレンが増えるのは格差が拡大しているからか？高層ビルや高級マンションが増えているのに、下町や郊外の庶民の住むトタン葺きのバラックはそのまま、停車する車の間を器用に歩き回る物乞いや物売りも相変わらずだ。

◎マニラのど真ん中、マカティで強盗に会う！

マニラの日比親善協会の招待で、施設の訪問やコンサートを一緒にした会員の皆さんと、夕食を共にする。フィリピンの女性と結婚し、マニラを生活の拠点にする方も多い。フィリピンは家族や、一族の中の誰かが豊かになると、皆がそれに頼って生活しようとする。又、成功した者もそれを当然として、認める。謂わば“分かち合いとぶら下がり”の社会で、奥さんの係累のぶら下がろう、食わせろとの圧力をヒシヒシと感ずるという。

日本も貧しい時代、家族の繋がりが強く、乏しい物を分かち合いながら、生活を支え合ったものだが、ぶら下がるという発想は少なく、助けを借りなくて済む様に、這い上がろうと努力し、競争したのではないだろうか？今の韓国ほど、過激ではないが。それがフィリピンでは、一人の成功者が出ると皆それにぶら下がり、働くのを止めてしまう者もいるという。勿論貧しい国民にその責めを帰すことはできないが、国民の勤勉さにも問題ありとしたら、フィリピンの経済低迷・貧困問題の根は深い。

チャリティコンサートの日、夕方まで時間が空いたので、丸の内と大手町と銀座をたしたようなマカティで昼飯でもと、賑わう巨大ショッピングモールをサンダルと短パン、ポロシャツの“汚い格好”で一人歩く。と、小太りの中年の男が、ホテルのガードマンです、休みなのですが、妻がここで働いてるんで来たんですと、上手な日本語で話し掛けてくる。どこまでもついて歩くので、少し怪しいなと思うが、一人で食べるよりは、飯食わしてやって、色々情報収集するのもいいかと“発想を転換”。美味しくて、安いフィリピン料理を食わせる所を案内しろというので、段々人通りの少ない方に行き、地下道に入るの、少しまずいかと思う間もなく、俺はフィリピンマフィアだと、胸倉を掴んでくる。咄嗟に大声を上げると、慌てて逃げ、シャツのボタン一つちぎられただけで済み、胸を撫で降ろす。川の汚れにめげ、マニラの海では泳げないと諦めていたのだが、ホテルに帰り直ちにプールで泳ぐ。高い塀と、銃を持ったガードマンが警備する高級ホテルで、カクテルを飲み、泳いだり、読書したり。リゾート気分を味わいながら“塀の中の平和と豊かさ”を思う。

日本でも格差の拡大が問題になっているが、国民の間の経済的格差が拡大し、生活困難な底辺層が拡大すれば、フィリピンのように治安の悪化は避けられない。競争のない社会にイノベーションも進歩もないが、韓国のように、競争の激し過ぎる社会も疲れる。日本でも警備会社とデベロッパーが提携して、マニラのマカティの高級住宅街のようにゴルフ場を囲むまではしないが、塀に囲まれ、ガードマンとセキュリティシステムによって24時間警備された住宅街が作られ始めている。しかし、塀の外に一旦出た時どうするのか？塀と塀の間を防弾ガラスつきの車で、警備員同乗で移動するのか？それとも、東京全体を、日本全体をすっぽり囲ってしまうのか？

◎チェンマイでは田圃の中のホテルが一番高い！

9月27日、生まれ故郷の八森町と隣村の峰浜村が合併して誕生した、八峰町発足記念式典に、三鷹寮後輩の（財）交通公社小林英俊理事を案内する。チェンマイでは田圃の中のホテルが一番高い！という示唆に富む観光開発の講演を聴く。街中の数多の高級ホテルよりも、田圃に囲まれ、自然の中の緑の農村風景と、ゆったり流れるアジアの稲作農業生活を体験できるホテルが、1泊4万円もするのに欧米人には人気だという。

講演を終えた夕方、小林君と薄暮の白神山地に入る。豆腐屋を営む中学同級の松岡町議の案内で留山の散策路、ぶなの水源林を初めて歩き切る。江戸時代から手付かずのぶなの森には熊も住み、太い幹に熊が登った爪跡が残る。ぶなの葉の間から、赤い夕陽が差し込み、世界中の“素晴らしい”を見尽くしたかと思われる小林君が、“素晴らしい”を連発。夜は、真っ黒に陽焼けした少年🐟が、暗くなるまで泳いだ、“夏が来れば思い出す”岩館海岸の民宿で、美味しい地魚をご馳走になる。町の三役と鮫鱈、のど黒、鮪、ハマチ、渡り蟹、サザエ、車海老、イカ、鰻・・食べきれない日本海の幸を肴に地酒の白瀑（しらたき）を茶碗酒。小林君を囲み、観光開発の話に花咲かす。久し振りに白神の銘木の香りで一杯の兄の家に泊り、朝は山菜と茸を半年分？お腹一杯に詰め込む。

東京から秋田新幹線こまちに乗り、秋田から弘前まで五能線を走るビュートレイン、リゾート白神に乗る。こまちは満席でやむなく喫煙席に。一日3往復、4両編成のリゾート白神も満席だ。観光客は確実に増えている。美しい白神の自然と豊かな海、山の幸を守りながら、田舎の皆も楽しみながら豊かになれる、観光開発を進めて欲しい。🐟も及ばずながら、力を貸せればと思う。

◎「容器・包装・リサイクルのこれから」・・・第13回能代山本フォーラム21

今回の講師は東京大学環境安全研究センター長で、容器・包装・リサイクル協会副理事長も務める山本和夫教授（工学博士）にお願いしました。

間もなく能代港のリサイクルポートの指定を受け、同和鉱業の能代港利用の話が具体化し、故郷、能代・山本地区が環境産業都市へ確かな一歩を踏み出します。故郷では既に廃プラスチックと火力発電の石炭灰からU字構を作る秋田エコプラッシュや、廃木材などを原料にするバイオマス発電など、環境産業がスタートしています。ただ、エコプラッシュも材料の廃プラスチックは多くを県外に頼っています。それは地元でのゴミの分別収集が進んでいないからでもあります。環境産業都市として更なる発展を図るためには、ゴミ処理を含め市民の環境に対する意識の深化が必要です。

リサイクルの第一人者の山本教授に、ゴミ収集・処理を含め、「容器・包装・リサイクル」のこれからについて話してもらいます。

日 時 1月19日(金曜)午後2時半開場、3時開会、5時より懇親会

場 所 能代キャッスルホテル 平安閣

会 費 講演会無料 懇親会5千円

申込・連絡先 飯坂 誠悦(Tel/fax0185-54-8953 E-mail: seiun-109@snow.ocn.ne.jp)

◎移転した村・・・ 黄土高原だより(NO.339) (2005.12.10)より

高見 邦雄(緑の地球ネットワーク事務局長)

12月7日朝7時に大同駅着。北京から夜行列車。暖房は入っていますが、外気に負け余りきかない。夜中に寒さで目がさめる。窓側を頭にしていたので、首筋から肩にかけてこわばっています。足もとにかけていたダウンジャケットを頭からすっぽり被りました。くる直前、猛烈な寒波がきたそうです。最低気温マイナス20度、最高気温マイナス13度。12月の初めとしては50年来のことで、その後少しずつやわらいでますが、山に上がって風に吹かれると、体の芯から冷えきります。今回は短い滞在ですが、1日さいて陽高県獅子屯郷の農村を回ってきました。郷政府で郷長の説明を受けたあと、移転して廃村になった村にいきました。高家窯といひます。「高」という名字の一族の村なのでしょう。私もこの農村では「姓高的日本人」(高という姓の日本人)と呼ばれますので、私の故郷のようなもの。平たいところから標高が200m余り高い山の上。30数戸の土の窯洞(ヤオトン)があり、ピークは200人近くが住んでいたそう。住人がいなくなり、まさに廃墟。家財道具といえるものは全くなく、古レンガまで持ち去られています。移転の直接の原因は湧水が涸れたこと。急斜面の幅50cmほどの小道を200mほど下り、谷底にいつてみました。コンクリートで囲った小さな湧き水があり、底に少しだけ水が溜まっていた。落ち葉が入り込んで濁っています。水があってもわずかだったでしょう。これだけの水でもそこに人が住み、村ができるのです。

谷をはさみ村の反対側に、猫の額ほどの段々畑が散らばります。こんな所でよく暮らせたものです。さらに上にも村がみえました。任家窯村といひ、井戸があるそうです。郷政府の統計では64戸、248人ですから、高家窯よりはずっと大きい。この郷の統計をみると、2003年の1人あたり年間収入は郷全体の平均で1357元(1元=13円)。当時は25の村があり、うち10の村が1000元以上で、最高は1957元。15の村が1000元未満で、最低の村は748元。それが高家窯村でした。2003年はかなりいい年だったようです。前年は、郷全体の平均で1288元。大旱魃の2001年は586元。そんな年、高家窯のような村はほとんど収入がなかったでしょう。ついでに1畝(6.7a)あたりの食糧生産高は、郷全体の平均で2003年は205kg。2002年は182kg。2001年は43kg。標高の低い平地の村はかなり豊かだと思います。衣食住には不自由しない、中国でいうところの「小康」です。放し飼いのブタがあちこちを歩いています。乳牛の飼育を専業にしている村も訪れました。それが1人あたり年収のいちばん多い村で、活気があります。案内してくれた郷長は、「豊かな村は、ますます豊かになり、貧しい村は、ますます貧しくなる」といひました。

最後に、高家窯村の移転先をみました。大きな村の外れに、小さなレンガ建てが並びます。政府の支給です。一般の住居は南向きに建てられますが、これは北向き。この地方の農家はたいい塀で囲まれています。金のある家はレンガ塀、一般的には土塀です。門は東南の角にあります。便所は西南の角。門のすぐ横に小さな建物があり、農具その他がしまっています。それが「南房」。1軒をのぞくと狭い室内に寸足らずのオンドルがあり、若夫婦と2か月の赤ん坊がいました。

北向きでとにかく寒い。私は慌てて逃げ出しました。能力もないのに首を突っ込むと、心中の負担が重くなるだけ。耕地は1人あたり1.5畝(10a)が配分されているそうです。この家は6畝(40a)。平地といっても塩害があるようですから、食べるのがやっとなでしょうね。それから出稼ぎにでる。あるじが家にいたのは子供が産まれたばかりだからでしょう。庭には井戸があり、手押しのポンプがありました。南向きの母家は各自がお金を貯めて、建てるのだそうです。すでに建築中の家もありましたが、それは数軒だけ。移ってきて2年がたっています。まだまだ、苦闘がつづくのでしょう。

◎「世界が直面する砂漠化～中国での防止の試み」・・・セミナーご案内

国連「砂漠・砂漠化に関する国際年」に因み、JICA 地球ひろばの「砂漠・砂漠化展」開催に際し、表題のセミナーと写真展を開催します。

☆セミナー パネリスト 明日香壽川さん(東北大学東北アジア研究センター教授)
中村 英(朝日新聞総合研究本部主任研究員)
高見 邦雄(緑の地球ネットワーク事務局長)

日 時・2006年11月11日(土) 13時30分～16時(開場13時)

会 場・JICA地球ひろば・講堂(3階) 電話 03-3400-7278

住所 渋谷区広尾4-2-24(東京メトロ日比谷線「広尾」A3出口徒歩1分)

参加費・500円

☆緑の地球ネットワーク写真パネル展 11月7日～18日(月曜休館9時半～21時半)

主催 認定特定非営利活動法人 緑の地球ネットワーク(GEN) 協賛・JICA

552-0012 大阪市港区市岡1-4-24 住宅情報ビル5F

TEL.06-6576-6181 FAX.06-6576-6182

E-mail gentree@s4.dion.ne.jp URL <http://homepage3.nifty.com/gentree/>

◎医療の現場から見た医療事情・・・三鷹クラブ第69回定例懇談会のご案内

今回は、昭和40年(1965年)入寮の須藤憲一杏林大学付属病院循環器外科主任教授に、最近の医療事情についてお話していただきます。

同期或いは同室の人々(例えば辰紘さんや干場革治さん)を差し置いて私に紹介の役が廻って来た訳は、昨年夏、私が須藤さんのお蔭で危うい生命をとりとめたからなのです。昨年6月10日朝、自宅で突然大動脈解離を、更に続いて、動脈瘤破裂を起こし、杏林大学付属病院で14時間余りの緊急手術を受けました。2週間後、意識を回復し、ICUから普通病室に移り、ふとしたきっかけから須藤さんが我が三鷹クラブの仲間であることを知り、あまりの偶然に驚き、歓び、そして感激一入でありました。

2箇所の大動脈瘤破裂のため、私の受ける手術の成功の可能性は10%を割っていたと後日聞きました。長時間の難手術を沈着冷静に成し遂げ、結果を聞いた他病院の専門医達から異口同音に「信じ難い程の見事なチームワークだ」と称賛された医療チームを指揮し、統率されたのが他ならぬ、須藤さんでありました。

退院の前日、辰紘さんに付添って貰って、かつての三鷹寮(現在の国際学生宿舎)までそろりそろりと歩きました。200メートル足らずの距離でした。そのような近くで、しかも寮仲間の手で、危うい生命を助けられようとは、全く思いも掛けぬことでした。人の縁の不思議さを、時を隔てて連なり続ける寮の友の結び付きの強さを痛感しました。

循環器外科主任教授としての須藤さんは、助教授、講師、研修医そして看護師と数十人のスタッフをまとめて、一人ひとり異なる症状を抱え、気難しく文句も多い多数の患者の生命を預かり、面倒を診ておられます。それがいかに貴重であり、過酷な仕事であるかを90日を超える入院を経て、ようやく幾分か判ったような気がします。その日々を支える精神的背景に、どこか三鷹寮的な適度のルースさ、広やかさが混入しているのではないかと私は感じました。

「循環器外科の世界は変化に乏しく、余り面白い話題はありません」とご本人は言われますが、広い視野から医療の現場に目を据えての率直なお話が伺えると期待するものです。

(29年入寮荒木健一記)

日時：平成18年12月1日(金) 18時30分～21時

場所：学士会館本館203号室(千代田区神田錦町3-28 TEL 03-3292-5931)

会費：5000円(会場費、夕食代・ビール代、通信費など込み)

申込先：平賀・干場 Fax 03-5689-8192 電話 03-5689-8182

(有)ティエフネットワーク Email: tfn-hoshiba@blue.ocn.ne.jp

◎東京大学ホームカミングデイ(11月11日)のご案内

独立行政法人化して以来、東大も卒業生との結びつきを強化しようとしております。母校の発展と社会への貢献拡大に寄与することはOBとしても望むところかと思えます。

また、「知の殿堂」としての母校の催しは、学術研究の最先端を分かり易く敷衍するもので、知的関心を大いに刺激してくれるものと思えます。既に案内を受け取っている方もあるかと思えますが、あらためて案内させていただきます。最先端に行く知的イベントが盛り沢山に用意されています。詳しくはホームページをご覧ください。

http://www.alumni.u-tokyo.ac.jp/gakuyukai/hcd2006/images/top_eventinfo.pdf

◎“技能五輪国際大会のために奔走中”(三鷹クラブ代表世話人 平賀俊行)

アマダイ通信読者の皆様に、貴重な紙面をお借りして、御礼とお願いを申し上げます。私は現在2007年11月に静岡で開催されるユニバーサル技能五輪国際大会について、主要企業、団体等の御支援を得べく奔走中です。その際、三鷹クラブでの御縁を背景に、多くの寮関係の方にお電話したり、お会いしたりして、協力を呼びかけました。突然のお願いにも拘らず、皆様に極めて好意的に対応していただいたこと、厚く御礼申し上げます。また3,000に達する読者諸兄にも、このようなイベントを機に、日本の産業の基盤を形成する技能の重要性について関心を向けていただくよう、とくにお願いしたいと存じます。

技能五輪国際大会の日本開催は、私が中央職業能力開発協会の理事長として、技能五輪などを所管していた頃(1995年まで、三鷹クラブが結成されたのもこの年です)からの悲願でした。残念ながら不況の長期化のため、実現は遅れましたが、2007年問題がクローズアップされているこの時期の大会開催は、大きな意義を持つものと考えます。

干場さん達が地球環境の問題に精力的に取り組んでおられますが、私自身は現場技能に光をあてることを生涯の課題と位置づけています。この大会への肩入れにとどまらず、息長く活動を続けたいと念じています。(再見)